

隠岐さや香 著 『文系と理系はなぜ分かれたのか』

—講談社新書、2018年、253頁—

科学技術の発展や経済のグローバル化などによって、社会における課題はより多様化・複雑化している。地域における課題も、特定の専門分野だけでは捉えきれない学際領域として認識されている。こうした課題に直面した社会からの要請として、全国各地の大学に学際性の高い学部や文理融合を謳う学部の新設が進んでいる。しかし一方で、日本の教育システムでは、大学受験を想定して高校生の段階で生徒の進路が文系と理系に分けられている。この期間に文系または理系としてのアイデンティティが芽生え、文理それぞれで科目構成が異なる大学受験を経て、大学に入学してくる。こうして醸成された学生における学問の二元化の認識は、文系と理系を含む学際性が高い学部の学生教育に、他にはない難しさを生んでいる。

さて、文系と理系にはそれほど大きな隔りがあるのでしょうか。評者は工学部で地球工学分野を学び、その後の大学院では社会科学系の研究科で社会工学分野を学び、大学教員になってからは学際領域である環境科学分野で研究に取り組んできた。また本学部に着任してから6年近く、学際領域の学際教育にも携わってきた。これらの経験を経て改めて考えると、研究において文系と理系に大きな隔りを感じることは少なかった。しかし、文理融合という言葉自体には違和感を覚えている。つまり、融合という状態になることはないのではないかと疑念である。また、本学部の学生教育の現場では、文理融合教育の実現に、前述した難しさを痛感している。

さて、そのような中で手に取った本書は、文系と理系の二元論の成り立ちや社会との関係

性、そして文系と理系の関わり合い方について解説がなされ、本学部の学生教育について大きなヒントを提供してくれる一冊である。

著者の隠岐さや香氏は、科学史を専門とし、本書の他にも『科学アカデミーと「有用な科学」—フォントネルの夢からコンドルセのユートピアへ—』(単著、名古屋大学出版会、2011年)や『科学の真理は永遠に不偏なのだろうか—サプライズの科学史入門』(共著、ベレ出版、2013年)のように欧州の科学史に関する著作や、『「役に立たない」研究の未来』(共著、柏書房、2021年)など日本の科学研究や高等教育に関する著作などがある。本書は其中でも、日本の教育を受けた多くの人知っていながら、実のところ曖昧に理解している、文系と理系という分け方について書かれており、文理融合について考える際には必読の書である。

本書は5章構成となっており、概括すると以下ようになる。

第1章「文系と理系はいつどのように分かれたのか」では、主に欧州における中世以降の学問の発展過程や、大学組織の変遷を通して、文系(人文・社会科学系)と理系(自然科学系)が分かれていく過程について解説している。ただし、実質的に人文・社会科学と自然科学という区分が社会において根付いたのは、19世紀頃からであり、本章では自然科学、人文科学、社会科学の黎明期や時代ごとの学問区分の認識について丁寧に語られている。

そして第2章「日本の近代化と文系・理系」では、東アジアにおける学問観や鎖国していた日本における学問の位置づけを踏まえた上で、西洋から学問を輸入し近代国家となっていっ

た経緯について解説されている。特に、西洋からの学問の輸入に際し、福沢諭吉の関心が「独立国家」のための実用知識に傾斜していたのに対し、オランダに留学して法学、経済学、統計学、哲学などを学んだ西周は、学問が「専門分化する」ことの重要性と、西洋の近代的諸学問全体を体系的に導入する必要性を主張していたという点が興味深い。西はその後、大学教育において人文・社会科学系専門科目を「心理上学」、自然科学系専門科目を「物理上学」と呼ぶことを提案している。これが、日本の教育システムにおける文系・理系の二元化のはしりとなった。そして、この二元化に最も影響を与えたのは、官僚制度において法律の試験を課したことと、中等教育について定めた第二次高等学校令による文科と理科の区分導入である。いずれも今日の文理の二元化に繋がるものであるが、もともと当時の日本が近代化するにあたり、法と工学の実務家育成が急務であったことが背景となっている。西洋と日本の学問観の違いでもあり、非常に興味深い内容である。

第3章「産業界と文系・理系」では、日本および欧米文系・理系の就職事情について解説するとともに、後半ではイノベーション政策との関連性について言及している。科学的知見をもとにした技術の革新による経済成長（イノベーション政策 1.0）、産官学連携や市場からのフィードバックをもとにした技術革新による経済成長（イノベーション政策 2.0）を経て顕在化した、環境や社会的公正さなどの課題の解決のために、自然科学だけでなく人文・社会科学も含めた技術革新による目標の追求（イノベーション政策 3.0）の潮流が生まれていることについて語られている。

第4章「ジェンダーと文系・理系」では、日本の自然科学系と人文・社会科学系におけるジェンダーバランスが、他の先進諸国と比べて著しく偏っている現状に触れつつ、ジェンダース

テレオタイプが研究の現場における多様性を失わせている構図について解説している。子ども時代から大学時代まで、女性が理工系から遠ざかる要因について指摘し、それが雇用問題にも繋がっていることが述べられている。

最後の第5章「研究の「学際化」と文系・理系」では、まとめとして、文系・理系の二元化の今後について考察している。教養教育の必要性が認識され実際に大学などでも再導入の流れがある一方で、文系・理系を分断するような議論もたびたび生まれてくる現状について解説している。その上で、自然科学も、人文・社会科学も、実は多面的な面があることを丁寧に説明している。また、学際的な研究の現場では、文系・理系や学問分野を横断して、専門性がある人、その間をつなぐ人、更には研究をしたことがない一般の人などで補い合いながら、集合知を追及していくという形が進むだろうと述べている。

筆者はこれまで、科学史をはじめ学問の発展に関する歴史的な経緯については不勉強で、十分な知識を持ち合わせていなかった。その中で文系・理系の二元化に染まった学生を対象とする学際教育の難しさに困惑していたが、本書を読み、当初抱いていた文系・理系の二元化への違和感、文理融合への違和感について、少しは解消できたように感じている。つまり、そもそも多様な学問分野にとって二元化も融合も不自然な認識の仕方であり、学問として必要があれば分化も融合も自然と進んでいく。現状として、地域資源創成学も、様々な学問分野が様々な「連携」を試しながら進む方向を模索していくことが重要であろう。（戸敷 浩介）